

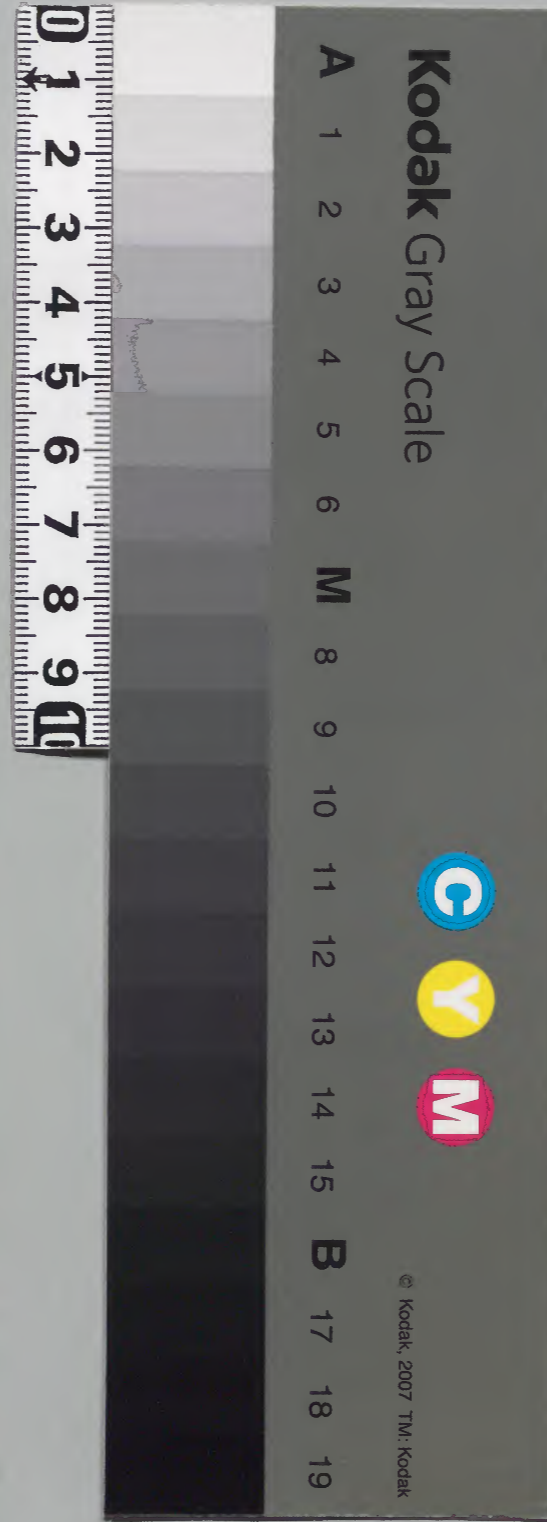
土丸日記創見

下之本

庫文官政太			
		七	和
		八	書
		二	門
		五	
一	九		
五	三	八	
冊	架	函	號類

庫文閣内			
		七	和
		八	書
		二	
		五	
二	〇		
二	函		
〇	架	冊	號類

内閣文庫			
番號	和	7825	
冊數	5	(4)
函號	202	345	



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり



土左日記

二十日きのり

うきへふきく

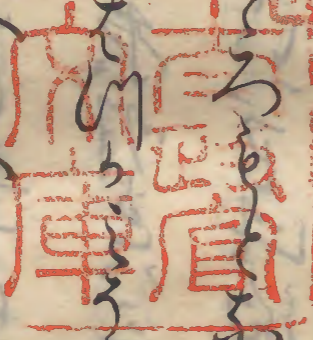
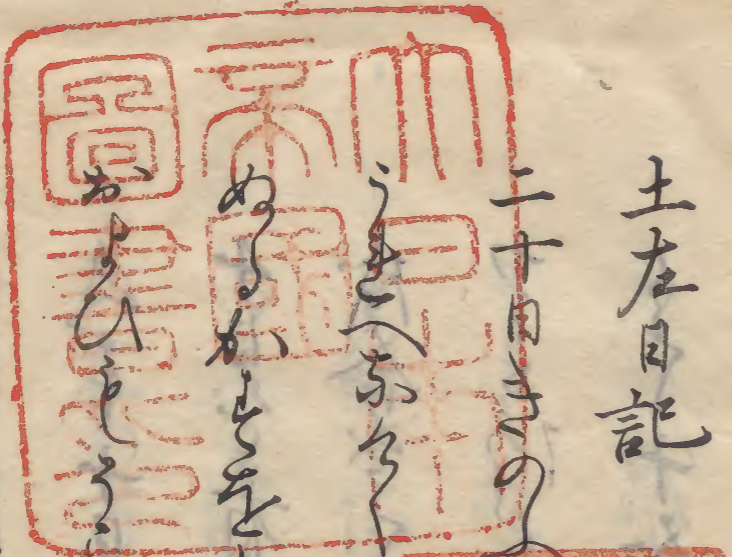
ぬきかききき

おひもきき

そいつり月いて

あつらういて

まじりのやく日



明治十一年

長

い河漕出へきこも愁ひをけきく心も落る
さねはくし種ねる日救れさかうさうとい舟出せ
うらわらふよそいくまを成る指の末もさ
久も十日也成二十日三十日と書てバめら
十日を有る也今承明也二十日れきハ大救
成命をくこそらといふ此泊よすく十日ハ
二日もはしきくはふうんトらさく不と見
上くく十五日の取もくく本日余望へぬい
らよ是成少もハ云く十六日よもさく弘よは
日よわんよすくは母日しわい河くはれ
アれとらり志る教^{アタヒ}回さくかへまよ其を指
もさこれらまへも也たよいハカレ也たよ
りたの者うれくよいよへき成カレとい
はハ調の自然也さうこれ物しよいもね
らよぬらう遅き今宵の昨日の月も出
といよいよいもねまらう此月出よ

らよ是成少もハ云く十六日よもさく弘よは
日よわんよすくは母日しわい河くはれ
アれとらり志る教^{アタヒ}回さくかへまよ其を指
もさこれらまへも也たよいハカレ也たよ
りたの者うれくよいよへき成カレとい
はハ調の自然也さうこれ物しよいもね
らよぬらう遅き今宵の昨日の月も出
といよいよいもねまらう此月出よ

まゝくつひよ彼地にて終るまゝ一人也さうふ
今帰るに未だ時とて何んか多しぬらうとて
さへあはれもやとて書札をれしとや加藤儀
足らば異よはくはくは時とて思ふも不也諸
本傳寫乃誤るんといふに私よはるべき不
は古今此詞書よといふも明別也さくそと少く
王維包倍等餞しと詩をといふなりといふ或
人云此文やうれ成るんやと打出る語の末

成文する所を不審なりと云青海原乃平乃
未だそのまゝとていふに落着きも也とて
ふらよとていふ成文とて仲麻呂のぬしと
今も同じ事成る再いといふはよく同中
一丁目とて重ぬる古文乃常れまゝか
く其文あき時ハけり此心成る事候よ似
成又重ぬいりて杖起しとていふ某云
とけあまいりて結びといふも再いといふ同

一 意人也。其本末の正つたはたしめくは
解つたもといふ其理耳よ入カとく其感心よ
とふやすきつ文辭の平入る事をも時
父終よへくもつぬ事也
あつてもやらるるんをの月いつまてうあ
りきりた力いふにわういひきり
をらとそまやあきん別きうねく廿日の月の
出るころも酒と詩をい作アうはきり也と

く其月ハくれかく海よわ出とといひきりてと
れと世に仲するなり彼地發私ハくはれ是と
いひ傳へしあきん廿六日の月も海上よわ出は
も故録を甲よもこれ今夜乃海よ月一けきん
更よそのく成心に出とて也
これをもくあつたなりわうふはうと歌う
をふんくもやとあきんいひはうとあつた
乃いよもわうとわうれをいひはうとあつた

よはくもして今ハ末なる業平朝長乃年ハ此
らにぐ文中ハ書けりね侍り也さる今も此の
私あつと此記乃真書よいしく其書様和乎
非列行定行書之聊有阙字款下無阙字
而書後詞云くはつて残らん是ハ彼紀氏の自筆
乃本といふハ年もたしこめく文中ハ書つ
ねいさる阙字はるしはさる定家卿騰
寫乃時今の別行ハ書人あり也さるハカと

よは此乎も志書はるねさ成何の心多くこれを
も別行ハ書ありしは朝長此款并ハ賈嶋
の詩をハ中將乃さ昔此をのハさる其詞
乎ハ詩よつるさるハ自然ハ阙多ク今ハ
よめり多款とて是ハ自然ハ阙ありし或自余
の乎といはくぬと拔拳て書ありしりの也又さ
く改めしるハ恐くハ後のさるも知へん
凡文中に阙字りく款をハる時ハ古款自乎の

さかきハそれ言付く一色くもよく其意
成きくともぞん思ひ乃不之れ感歎一なる也
事此らる成男りしとき同く其さ満を
も書出してとい成つあぐけり事此ら
こと何ふは此ら秋のころ也や事成書出
何ふはといこれ其由を成去也此を
る亦七日の雨は都遠し此とい事此は満を
と何ふは事も其いこれ明帝此事なり

成さるはく漢文あるは誰とてはし得
事此ら此詞了くも又い此
こと何ふは其并れくもさや此ら成委
是れいもといしうも也此はく按
此年成明州くは満をとい事 和漢とも其
證據多き事也續日本後紀の詔詞乃中唯
有於天之章長傳擲地之響とあり此成
證大なりは并成さるれといも

らもはく此平正の古今集よりなり
下月をいふよある天の系云々
左注の如くは武日記と大なる同
也この別書は陸奥の伴麻呂の詩あり
聞傳へたりやさしよるは彼并成も同討
也この附會して唐人を尋ねり
答ふて一時の訛言なり
此を在りては我慕ひ傳へり
調

いら志多く又よ苗別の辨は非と今
海系とて是るうの意は八力と
解へてはたよ四十年は同の國
人の物んともは今も吾國の平
やとてあるれんや又さるわ彼地
一人の今更譯をいふむんや
たりとて名はあやとて
成や紀氏に世に傳へり

山成志しまれり同し志をいふは此のうら
を思ひやアキといふ此年成後撰は海より出
く海よりいふとて入らざるは非也山
對し海とありんうら思ひゆく思ひれ
しは水と波より出く波よりいふといふ
しを其れしきむて山浮る旅情もうら
物されしむく海より出く海よりいふは諸
調たくりして山なるをいふれはもろき志

へは應きむはあはれ東西は海よりいふ
らむせられくくはあはれ成開きへし
へく紀氏の年成梨壺の五日後撰は並し入
らむるも一首もけられしとてたむはれ
況やうらむはあはれ拾遺は年成撰者喜
は筆削されしはあはれ蛇はたむはれ類い
はくいふく傍り痛きも也其はりしは乃
かむく紀氏の家集は辨せり

其出する本此意の河しきりのもてて成いのと
らきりてはくには高の事なりは後の事也
さ中よたむくたなる事もたなるよ兼此言を
そいよ時の臆乃意れよとる海もすよ大乃
意よも通へる事とる西りり吉今此底のき
測やハさよく山川の浅き瀬よ丁そけの波を
とくと何も平成六帖よたなる事の測やハ
わくとありこれ大乃意よと限りぬく海は成

いりて底のきといふよとる人々の物語をよ
も廣大乃意成たなる事の志くといふ事
すはらよとるハ此たなるけの願ひもたけ
さうぬよとるハ俗に容易さぬといふ也や
てまされたりたハ此音便也されハたなる事
の形ハ種々ぬ願ひよとる大願念願をよの志と
きくハ一彼をよとる方よ此といふ事よとる
混成ハよとる此日須佛神を祈く保く

ふよふくろとわやそをれ名をんよはそれ
アハ心なくいアもまたまぐへるまを波も白波
ともいそ白き波をといふはあふ思まふむ
いそ成いりいせん決りふねよわおあさふれ
アもこれ平の取よ此詞り平れやれは楫取のた
りつらり河まをれはつらり河よ早よへん
かくいひつていよはあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

ううあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ
わああふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふ

この私君波をそは波成んといふもよふといふ
意也といふし土佐の國を私出せぬをいふ
と海城等國守乃命よてまをく追捕せられ成
いふといふいふいふの帰路を待てて其報いせん

いふ事、我傳へきく然り早しううし又日之
風波のたそふりきよきあひく頭もこれ白髪と
里果ぬも此より南海へ前伊豫掾藤原純友
國乃賊首平将門も與力に托せ多くも帝都
も我より狭きかき系責はふんも徒黨乃
群盜千数艘をいきあて海上を横行し或は都
邑我抄掠し狼藉甚しく不ふんと大やぎ
ももく余はれし時也昔も土佐の敵國に接し

いよに尤寂初より防禦の要害より籠り志をく
戦い物ぞれやたやとく犯す事阿ふあり
あふんははる方此遺恨きあふれくあふ
も報いすもこれ時を待てるし今も土人此
口碑に云純友の叛逆紀氏の任末よりわ尤不意
よいてきあふく無勢あるも浦戸の水門
我より死力を削ぐて防ぎあひしは
や賊船一度も余に事成得たりし其智勇

我語り傳へて却て秋仙ありて志しきもの多
けり云々たるも諭使ありてやて是の紀氏
退去れ後すをとも同國ハ多郡ハつは賊は
焼亡せりやうと備前介于高播磨介惟幹を
と救兵をくして此賊乃為身成殞きんて我
しくもはれりも此や紀氏乃畏すもうへ事
きりし海乃松をるしんれんといひし行は
申す就く此室津は日しるへて今日まで所
也

一昔一昔とていふ重々の日救れあいに十五
日此の徒よ目をゆき入る海成りりりりり
何といふよわ十六日も只海に波をくして
いかんかといふ事もいふ事もいふ事もいふ
事ハ何事もたれぬ云々月しるくはしき心や
甲よよめ云々昨日廿日の事もいふ人々患へる
只日此種ぬる救を云々此と徒歎れりて是ハ今
日乃舟成もたれぬとの願ひよわくにはや

んを事て飲へる其くはしる中へはははる
され上乃波をえとといふ者も海わたる
をさといふよかたれる也其並にやねく此海賊
乃たその成も加いりてはと風波りさるり
さふくは苦くといふてたをるしといふ海賊
此のよといふ也さく世人悲いよ何ハ白髪と
るりのるさハかいら志く成ぬといひく苦
く悲くも成んぬ又魏乃韋仲将々凌雲乃額

成書しにたをる事忽ち白髪とふまると例ふ
思ふ下めりあさく歌乃為よりねくもれさる白
髪を今此海路乃悲くさよ一時は志く成り
さよに書れしこれ歌へるいづくはく此歌
は海中より有りといふ今年紀氏乃歌七
十三四歳ふれはあそちやそらといふま
さく歌乃意より髪は積むる雪し磯を
よ波といひまら志るき津津嶋守備り

くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに
くわんせうのうらなひに

泊る幾時をされたるに
たにのきとていひをぬ
くわんせうのうらなひに
有き心一省
これとて男はとら年
たわらとれき生

質あるけりうらなひに
山乃瑞此舟の門をて由
くやうにんある成に
怪しき事なり平哉と
よと出する也かく漕
もは松山乃
ゆくと志しやあんな
いよるを松此
たまは走らんあめ
成松中は在るゆ
くともた下しぬ人
のうらなひに言
りて

ゆかり行觸りて波乃行りて
く碎る花よ似たりといふ
とありて同一意也萬葉古今等道行
ゆかり行りて波乃行りて
れとてあつて常にいへり萬葉は吾背見我
白細衣往觸者云く草枕客行人毛往觸
者云くをくハ俊頼此方よとて一升此み下陰
よゆきてゆきハ衣子言一増んぬきと也

仲實大系や松不ろ此水一ゆき物色を夏
ゆかりをられりかのゆきをけりてとつて秋
雪と花とふとつてゆきとつて雪降
と意得るゆかりと也波乃雪物りといふ意
ゆかりよハ雪ふりてゆきと波乃とれくは
語成る事也波の色此雪よ似る事
やとよよとつてゆきとつてはゆかり
とて秋乃意いふは波と此とつてゆきとつて

川をよみんまハ雪とをしの二一人よすうい
アし云年竟青成まけを波よてを成これ
ハ雪花りかしといふ言成あやといふ
廿三日日てアしてくものぬこのもあうくこのあう
アあまといひかまがけをいひ

昼よの曇りアしあう人し初春れさうさ海也
廿四日きのよ乃あましとらあま
たかしきれよ乃取也といふを志くしよまを

廿五日かちとりら乃きよをあしとらあま
すうういひくしとらあま

海賊追う河といふ事水陸乃驛つたのし間
あく岩くも也されと北少風し海上に
いへもえも漕出まといふ一本からりら
うまもくとも後よへり此又字のりつ六語を

廿六日

てもなつへーさく楫取りくりのさくも其ぬ
さもさるらへも其の風乃東へさるらへ吹や建て
さく船中らへ申す言ハさくも也
北風さるらへ北に向ハ南風さるらへ時をた乃
つる神のはきさるらへあけさるらへ方り思ひさ
又ぬさるらへさく彼きさるらへさくもさく散へさ
さるらへたれ東南へ亂せん哉さるらへ
んさるらへ南へさく其らさるらへ方れ都乃さく速く

よさるらへあさるらへといふ也諸本おまはさるらへ船
哉いさるらへさく何さるらへさく一此ぬさるらへさく
よら秋くけさく思さるらへ秋明く此さるらへさくおま
はさるらへさるらへさく此言くさるらへさく語勢けさるらへ
まさるらへさるらへ此さるらへさくさるらへ夜半に舟
哉出さるらへさくハ語勢急さるらへ清出さるらへさくさ
さ向すさるらへさく同さるらへ也平此意今さるらへさく
これら物さるらへ神さるらへさく向さるらへさく幣乃吹さ

そらも其返手此風や
都へ川のあふんと願ふ也
と法抄よいつと其之集よ
時も玉祥乃らよ此神
もといつくまれ其乃より
尚時さる神乃名を
とも定めく

チフリ

童乃平此神裁

かひを乃よき
うもつらわれ
かくまらうらに北風
あつちれ
かひを乃よき
うもつらわれ
かくまらうらに北風

此道子に在るは奴志六此幣乃ちちりかすりきく
といひて撮取等いれり得る不いりて得る
く帆多きふと以不に依る俗は鼻高し帆は
ふ也其音成まきくわくもたきれも都へいり
いりて思いをれかやきりかひするふも也
さ中にも浪路りくわくといふ人よるといり
余りふまの平かく追風はれりぬる時人の
帆はくしり舟まふもくわくうれかすとい

不て帆乃ちまき帆網をいひ追子りきといく
帆腹成くく網の音れまき聞ゆる成まき
了俳諧平也今も帆乃ちる聲成なくうり
といふよ一西乃國人いへり上は帆多れとよ
ふ其音成まきくといふはまき為也今俗は
人をいや一わくいひ時成まきく不てとい
小事いりてまきハ細子乃略く細首細唇を
いふ類しや當時もまきいひ成帆乃ちまき

ホッテ

ホツクヒ
ホツハキ

よやうんはく此うれしるるるのりあ濁く
唱ふしとたねよといふうりかつ次しやくや
しうふちとつるりと同意れき也意き風
波乃とよれきたる成悦し余中をか心なき
恥中てりたかきといふもよ意成ていけ
此事は例きくいとよや程考よとい
いせいにしとつるの通しとてぬらうはま
徳本といふとある小従よへき

一冊

世の世のあつるれは毎しよとこれれ
りくさく
かまは世の世のあつるれは毎しよとこれれ
いといふるしよ意よく甚しくいふき方は
れきり俗きつうをいふ也がこをたを
そりれ事ハ狂くぬきれは自然なる
小用いられしり伊勢物語よいしがこ思ひ
あつるし心なるあつるといふがこたか

アまいぐれといふことれはゆめく思ひたるは
くたぐらも也倭物語もいふことくめてあり
くつかりのたまふいふがごとく飲ひあはる
とらる
をこそもち乃わらうと日なのうらわやことわ
みとらあまのこをききてある女のよめい
日をももあまのつとくものをさやくと
あまら乃そらるる

女ををしとくそらとはせさく詩ハ船中誰
その作多し其の中は望日長安遠の
事れえら成いよと問きくハ晋書乃明
帝記の文は明帝數歳元帝抱置膝前
屬長安使来因問汝謂日與長安孰遠對
曰長安近不聞人後日邊来居然可知也元
帝異之明日宴群僚又問之對曰日近元
帝失色曰何乃異問者之言對曰舉目則

見日不見長安由是益奇之とらり此意を
とりて他意多也と問之それよりきてよめる
秋といふとるり遂に照す日も見る由もハ
とをきかりの代に川を思ひや都への居
けり乃きき事よ也挙目則見日不見長
安此意浅き多くより里天雲のきりよ枕
よる川をいへりすも決よも大電此をきり
此よりかひり河とよる成却とるりよ天

三十一

そちくといふよ大空の川を海上よる
果てしなく日影乃ちまはる由あり

まゝあひと乃よめ

くを乃とぬかきりしとちくれのきり

らもあうりたり日ひとひをやすはす

きくぬぬ

ゆく風乃ちきやまぬるたの川波もまや
まぬる其波ゆくるはとる果ていよく

一色にまはるべきはあはれよく誅んせむ事よ
しつち源氏の帯木よじくひなき事よ
はしき茂しく宣蟬よひまをききをし
うし給ふ枕草紙よつまをい記をして
もいなきしけさるしひ中按さる密家の
不作よ弾指しく物を撥造する事よ
う世よりひかりを物成忘るくやれ事
よハ帯に走る事よんたる事よのう浮

屠氏よわ出く世にれを海幸サレとせ
廿八日よもすくあめもやまをけさも

終日よゆまぬ風よ秋もまう雨も降く
くまも形不カサト也

廿九日よぬしつゆくしつとらくこ
はれ赤くさるを日をうくれハハ子
れハきくむしきあれハ末乃子れひの
てしつもさるしつあされハ

しき此より風雨多きと上紀日なりと此より也
下アミク清ゆくとるふれは語を此きぬよ以て
打とま今くそのまか流取らて又字ハ今此よりと
廿五がかりて此てもく語きも事也とらそく
とてまきくはくこれゆくといふとわよかりて
らよ引つるまきり非中前此廿一日ふまき日
廿八いぐ記て清ゆくといふも何し記也上よむ
かこれ入成思のいといひ記る時より廿五

廿五

海云く又海乃神はたらくといひく何乃ら
うまよ云く後まゆりよし随ひくいふん
眼もこそゆつ川あきまこれといふこれらの思
ひ出くたらてといひくいふんよて此よの
又字も今此よりよてハ落カぬ也倭物語よ
男おろしりといふくよてまきく志すゆきり
まハいと浅まきしと思ひたり言穂し笛より
いとこれやうに心あまきく登ハ又成二すまき三浦

きえ源氏よまのり友よく今くもやうき
何んよてまれよまをよ父よこれやうれ
よよいよよ一つまて物よまよまよ枕草紙
よ志多まよ色けよまれよまよ山乃井大納
言ハよいよいよれ乃のりよまよた
よ今よ所よ一よ出よを給よまよ何よ此来り
もく来よといよいよまよ心よくといよ
て何んよまよいよいよいよいよいよ

五三ノ世

又字之れ同意よく此外も挙はよ堪よ古今
序よもうぬめ乃戯まよわよまよ此二平ハ云
よかよまよ格よまよ格古語よ多よ委よくハ
まよ辨まよ中諸中いれよいよれよまよた
てよ何よまよ後よ一今れよまよ成んよ
まよ何よまよ又子れ日よまよ書ハよ何よ
よ今子れ日よまよ何よ上りよまよ下
れよ何よれよ何よ最後のまよは語辨りま

何れに調ふはと云ふ也と云ふ其の瓜きん
為十二支此目を成るを八名を六子に日なり
と云ふ抄云拾芥抄と云ふ此日八子此瓜寅乃
日は此瓜きんより名をたると云ふ此成行や
と云ふ正成よりもめつと云ふ春めきと云ふ
と云ふ心も桂と云ふ瓜乃延る目よ何き
其瓜きんと云ふはより子日此と云ふ及へん
何き此成るをまゝと云ふ此内なれんといふ意

土三ノ世六

と云ふ也初子中此子も何れに成心何れと云ふ
よ末此子成事よ何れと云ふ思ひ出されし旅
中乃と云ふ也と云ふ都ハと云ふと云ふ思ひやると
何れと云ふ松と云ふ何れと云ふ何れと云ふ松中何れ
それと云ふ事難と云ふ也何れと云ふ松も何
何れと云ふ何れと云ふ海中と云ふ抄よと云ふ此
子日乃日此字ハ何れと云ふ何れと云ふ何れ
何れと云ふ何れと云ふ事也

を人あきまきくいしむるうし
かたのまきふいねのひうあまあきふらうまのをい
ひうまのものをとうりぬくまきぬのひれ
まきいしあきん

法本阿るをんをとありま後よへ今日子此
日れまかたふの家実よまうの海底よ生るうと
松成ふまけう浦り成海人あきぬをまきもえう
とと云日れまきふたもくへまきまうつ子日め

土三ノ 世七

くきききもれまき子日とらや物む方よい
里九子日乃遊ハ初子か力とよわまき申此予
松と予二月れ子日まきも事に隨ハ折り物
まきまきする事也うと浦つハ海松也法松ハ内膳
式ももんまきまきまきまきまきまきまきまきまき
纏ふまきの称まきあまきまきまきまきまきまき
まきまき其文字まきまきまきまきまきまきまき
也常小まきまきまきまきまきまきまきまきまき

子日野よても流りのまよ、海をこれ子日
 川のまよくく秋をよまよまよ、
 いろはのんあ、
 成不むる例乃也
 すあゝ人乃よあゝうゝ
 くらまれとわゝるもはすすかまゝののわゝるまゝ
 今日子日れまゝもわゝるゝむらゝもせまゝ

三ノ世八

さゝらうくゝ花も流浦まよま日野乃かけ
 まゝ也世人のれまゝもあゝといゝへき成ま日
 野とさゝらうてゝいゝまゝをいゝくゝてめくたゝ
 さゝく今れ都まゝ若菜川まゝん取成いゝ
 嗟疏野、松尾芥川まゝまゝへまゝを昔時
 何乃うゝまゝいゝまゝ平城の舊俗遺まゝ若
 菜といゝまゝまゝま日野と唱（出る事れまゝ）
 十此外も花といゝハ芳世泊瀬紅葉といゝ

三宝龍田成稱も類いさくさくしきつて
旧稱をいひるをさくす此之れは外よいさくさく
事別よ論さわ又子日は松を引ハリとありよ
く必新菜もつめ今も打中又さくさくされ
といへば公事根源云七種云く内藏寮さ
くといへ内膳司より正月上乃子日之れを奉侍
寛平年中より始まるとやと何れもさくさく其
かふも之れいひよわ松を引も松さくさくありの也

土三ノ 世九

其引之係若松乃根此いゆん成祝いよさく
子見りりのさ事とれは若菜も老さ奴名
成よさくさくさく之れ言靈乃さくさくいさく
さく乃つさくさくさくさくさくさくさくさく
記云正月七日俗以七種菜作羹食之人無万病
ふといへば類い乃事成もよさくい用いさくさく
や若菜いひを七日と定めしも此れ唐文
よよりて也さくさく菅家文草云予亦嘗聞故

去書しり事よていふもも紛るべきはらふ
らぬ人よ寂初よ或人あしめ云く書く土佐
ともいふ奴を今さういふは打出んハ文りさ
満もたういぬ也さく此ら成昔といひる
一土佐國を土佐といひ多取といひく國ら
く此らも其國守らり吾人成住多女と
いひ私中いそつて土佐よ在一人成住私
小ま一れりあわしにいふわ此満よ書れり

三十四

之れ思ひん事一滑稽也名いハ名のハ
い乃此文字脱いぬ之ハ名いとい事
有へうも名れを秋の意明らざり
二十日あわむとあうといふハあまきせさる
きつて衆中いりりしおねをいりてあはれを
とく衆中されいひんハ男をん
あうく神わけをいりてをわたりぬ
今日ハ日頃よかんてく後雨り

風も吹さる也さく彼強盗ハ夜陰ノ忍小類ハ
さしよのけさく昼伏便利として追来し
城周くさるハ此風雨なき夜此不とも阿波此
水門をハ渡らんとして板守けるも土佐の泊を
漕出也さるる此の賊私ハ襲い来る事夜
よぬきまなく物々候ふも盗人の常此や年成
少くもよ家あり候き礼里をいひこふく
書ハ例乃也い半のいを怪らすく海賊板

行きしといへ成古来いふくハ和をいとい
上へやまく紀氏此上洛と入らむく紀淑人賊
徒追討使をく秘く伊豫守とて下り礼竟り
平治さるれり重淑人ハ此れも紀氏乃松子
洲生れ才りてとる古今集此作者也倭物
語ノ野大貳とて友ははもあ時うて此使もさ
ましく少将とて下り板守と書も此時を冬
議好志此と列りてさく物さるれ也さくも例を

き南海乃るるを成る書るるを世人は凡そ
も同き事とておろそかにせざる滑槍乃いさ
也頭書よ今もそ浪風あらしといふも四國
乃地を傳ひ其を重しこれ乃海賊よき事
和泉國よつるれ其のりや心かれ神
件を祈る也といふれ乃風波乃祈りも
物々海賊を避る乃祈りも事々それ也
今八和泉乃國よ来ぬ其法織りのありと

上三
四十一

いふ事も考へてその此乃渡津此
乃戰場乃日教よい事とて
了了時を幸ひて和泉此灘よ漕つん
とす也乃海賊夜行せしといふ事
必ふゝあまれも木を賊船八陣頭乃夜討
し風雨を願ふといふ風波此事
系りく力の事とて乃を六右阿波の鳴門
此乃海峽隘乃切不しく走るも東西

奴圍夜も取圍中も亦六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

とく伊勢加茂八幡をけしめしめぬく靈社よ
封戸を寄らしも諸寺法山乃御禱ハいよも更也
宮中に相成るも衆僧よ命りて仁王會太元法
を志しく終行きしれりてさるがまゝいし備る
も世也況や今ハ其凶賊もよませりて追討
せんはなまのれいしれりて誰ハ佛神を祈念せ
んも思ふことかたしめりて丹精成ぬく月
身もかたしめりて念を成りて

もも落のき悦小也たれを此日記にたけして
くはまやくし記をら此事いふくをなれは
やじを得るふありてふはく漫の書けり
まきくましく世をうれれくしむるされは世
たれやまけん海賊のうへふはかきくはあ
らぬ取よれとたきしれははまふふ其事六
とまらましくああるにも正記のたけくいふ斗
明ん思にやうく其外はる事いふく

此不同し取也といひ文時維茂の松たぐまは
りあしんてふ不風波りふよまきくも日教茂
はし給ふ多分ふの海賊の進退を伺はきり
明んまきよは文は物れ具のいふれく太刀の緒と
まきく麻多入り一夜もれるまけん吉来此記の
全文滑稽有る成んは古河の古河の聞志
りあしんてふは其意をよし得る事なり
くいふはきくたれかぬは南はま思へんは

乃匣尔乘有鏡成見津乃濱辺尔云此乃

日鏡ハ柳菊ノ乘ハ力ノを也

ナシキニ乃ノ...

...

...

...

...

...

出ノ...

按...

必暴風...

...

...

...

...

ぬも也いねる出とハ出と成志ある出とや
うれ意いそからうてやうくにはゆる成いよ志い
へん物よりくハ志いねる馬謀多と一志いハ志い
小事もて成志と志いハ妙壽本は証字成る
成る成意もくそ多しぬ事成を成りしと成い
小也今もよと思ひ今もよと成りし成を成りし
ハいいしと一と云意也つめくハ成りしと成い
事此もく成りしと成りしと成りしと成りしと

三十一

其れを成りしと成りしと成りしと成りしと
とよよ成りしと成りしと成りしと成りしと
ふとうり成りしと成りしと成りしと成りしと
二日あせやす日いしと成りしと成りしと
多ハ雨ハ降と成りしと成りしと成りしと
秋成多と成りしと成りしと成りしと成りしと
三日うらなと成りしと成りしと成りしと成りしと
れ少く成りしと成りしと成りしと成りしと

んり序を重くもしく此心よすにけりてうらみ
と心のよらうて思はるる今もうらみの心よらう
も妨るすは世とこへもたつ方お祀持りて
るれは語乃とわらふれをさす也んもく一はく
其波のせれく乱るる心よらうて思はるる也緒をえ
よりこれと其うにもさきりのなぐ絶ち落し満
ちる涙乃玉成ハ元奴きとわらうて思はるる也
よ波をうけりて心よらうて思はるる也

知下物さハ風やましく日殺す事成歎く涙
也緒をよりて思はるる中よははらわさす
あしん玉此緒をいよもさす也りてゆいおに
もやうれさすい貴きいやし兒たらくをさく
ふもつりて思はるる事禱さくいよもさす也
大和物語よ後子よ色くそあやわさ何とこれ
何んかてさ繪りけりといは枕草紙よ
半臂此緒いぬをけしむる日といはけり

よきといひ源氏よ徳角の君此系よりかよは
ほふと思ひわをたへし此松中乃児女も長
き百教をさし後より入るべきわをも忍びくはさ
るるさせ成くしへしと列ぐそ其下れは緒も
このまゝの玉をばえもぬくそともよ備きくん女と
いよいばさるるもは女奴もあましくん世しハ結
成よりくしひなきれと何をもえんくハ誰もやう
くさぬくそそ思ひゆるぬくはしはくそハ此初句

いよきいれきしりの也は一幸も緒をばさるるもか
いふきしり緒があるももういふくんとくいふやう
此意はへるハさうけくよりのもいよし一結を
よりくしひるきしりのはと何はくくよりてもうい
れきといふくはくハさあよハさるれぬくそら
そやうく次ふる小津乃泊よても妹もうじを例
乃松系と梳したるきくも例のえりりの成用ハ
らまはるや前にも暁月夜いと面白けきそ

云々けりき我いに詩を八福いり事成き
在昔土佐といひき不も任多女此弘も交也
里多といひく皆土佐も在り人ありたのれ
もく其國の守物なり事成き女次り此泊
此濱より海なり見石をたかく云々とい
下や多く人これたてて捨いり事成思て女神
り心のある法り此年ハ程なりあはるへも成
して歌なりあはる中も多し同せし流を程は満

土三ノ 五十五

乃書しりたより大やういりあへも限り成とい
はるはるたをいりぬりたよりいりたより書り
大なる此記乃心也なりはるいり子歳をとり
く其真を考り人稀也く一涼く心をやりて
察やとハ何なりたよりたよりたよりたより
里より
四目かとりり風雪乃もきをさりてあつと
下やぬいりたよりたよりたよりたよりたより

せしすしこれちとりひの色ええさぬさぬか
四日 檄取いしく成る日此風雨さあ乃風波此如
たさしきんねとく乃の風あひ雲けき却く
ゆらんあつと漕出へんといひくも備ま
まうは終日たやのしや也此檄取はた乃
職分たてけの事もえさるる取役さ
も也といふ片時もあつくと神佛を乞ふ祈る中
よかくよん成徒よさ成むいわくかぐん

かくいひれくしきさやう聖日その風はいつく
たしれあられし面目を成り例はる也
けふんさばをかく成は調よささくはさるさ
とよよすなれし精々也やうく此語のやうや
くといふは同一く是もうれくに轉さる
之れ同歌乃うも也をる物の生端をいふ称よ
く山くれ棒とれあふ水れ出ると寐入をれさ
い類く人面は隆起さ成鼻といふ樹

抄よ發露もて成華といふを之れ此意也
は
く何れも重ぬる時其語活きて其境を得る
例よて終よをれもて其不はく其れに
意よ何れも来いもるりの也く其れと深
不具ある者成いよわ出する稱よ癩疾の老
をいふも其意何れも彼身軀不具あるりの正
望よる事何れも其れをけは傾く白わらわ
片居といふ衣果穢乃者よ多くはる孤獨よ

一と養上人ふる色はらもるも其く物を乞ふ
おもてをく乞見の稱よ之れ已後よはく不
具ある者をいふといはく乞見は成るる
よ別てる可いも其れをわら語よて可い
似る事也くはの事よ今辨きや禪の頑愚
此人をも心乃不具ある方より轉く可い
えれよあるも其れはそれよ今
分のやよまたよていぬるといふ也畢竟不

具ある者ハ世ニ廢モク物ノ用ヨク取リ志ト
人談ルヤハヤハビシ言ハレクモ也伊勢物産
よ世ニ行ハレケル可ク符板敷レ志スルハ
何カモクトアラスモ今此辭言ハ腰ぬカ親父を
とシヨク宇治拾遺ヨクヤレカカカ多クテ
僧綱トモ不スキトイフモヤレヤクニ
ハシヨ也赤門ヤシヨ食トイハハ非セヨ見
まハト

五十八

ころとちわのをキキハクニクニクニクニクニ
おとがやうりたれハシヨシヨシヨシヨシヨシヨ
ハシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ
よすハシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ
おろくハシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ

まハト此濱道ハ今モいろク此貝石多クカ
ハシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨシヨ
我見モハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ

此のよまれはる也私ある人乃よめるといふは
いふよとて余此人の演進を遊する事志す一は
面白く演つて教日身する事とていふんよ女を
たれきりのこと也誰の人かたれきり物きり
ん況やきりもいねりとも波風を記してん
をり力きり論多き事知はくく人よん女を
委しくいふはる也諸注しく具石成んやり思
ひ出るとするものいれれは心成用いしくいふ

いよはる波よ日しくい思ふ人をいふはる具
成も少く女あんなくも共よむる事拾
はん成也
といれあはるひとくもはるはるはるはる
わされひひらひひらひひらひひらひひらひ
まはるひひらひひらひひらひひらひひらひ
よおやをいひひらひひらひひらひひらひ
此平成聞く或人悲しき人よんひらひひらひ

よめもといふ松乃心舟底我いふ也
此たりのをやはらぐ松此心や
濱へはつるすいへりや波乃
志貝成ハ吾とほふ捨いもさ
と思んといふ玉や貝や同一清
れはやく亡思
いふ常此事少く俗も玉此や
子

五三ノ 六

いふ万葉山上憶良此思成
平よ和歌中能産禮出有白玉之吾子古日者
云く源重之向一愁い
いづくも今
此をうの
児詩掌珠一顆見三歳鬢雪千莖父六旬室
料汝先為異物常憂吾不見成人
玉

いとぬと傷^二小女子^一待^レ終知恩愛^三迎^二三
歳未^レ辨^二東西^一過^二一生^一此^レ何^レも外^二あり^一以^レ磨
も大^レ和^レ昔^も今^も予^レ成^レ甲^二小^一此^レ哀^レ情^{露^レも}
了^レさ^レり^ぬり^とす^色ハ^レ此^レ見^レ女^レ此^レ不^レ親^も子^女
此^レ不^レた^るま^れ此^レ不^レ奴^とい^ふは^レ此^レ不^レ忘^見を^拾い
下^レ忘^もん^{とい}い^又拾^もん^て下^レや^れぬ^成る^こ
三^にい^んと^いふ^をと^之此^をと^此を^と此^をと^此を^と此^をと^此を^と
を^此子^此為^よと^いい^く親^種と^いふ^はい^ふは^いふ^はい^ふ

三十一 空

玉^ある^もあ^まる^をと^いふ^人い^ふ人^やさ^れも^さる^か
不^より^きと^いふ^やも^ある^か

人^此平^成さ^るく^玉よ^いあ^るに^おき^んり^あを^と
い^い落^さん^やと^いふ^も志^よ不^より^いい^い
い^ふく^いま^い方^此ま^るけ^るけ^ると^也親^此よ^くあ^ま
白^玉れ^いい^まと^志よ^いま^も又^いふ^も又^い
い^ふん^は志^も命^終の^時顔^色う^らハ^りり^か

ハ生ニサラ更ニ玉ニ明ニくニたニもニいニすニくニ疑ニさニるニ松ニやニさ
るニ死ニ相ニよニりニくニそニ人ニ間ニ善ニ悪ニ此ニ真ニ實ニもニ何ニ
はニれニといニりニ志ニすニ不ニハニ今ニいニ志ニ顔ニ也ニ於ニ死ニの
さニ悔ニよニんニ由ニ此ニハニ常ニにニ変ニぬニ顔ニもニ女ニのニさニりニ
廉ニハニ一ニをニつニらニぬニ抄ニよニ臨ニ終ニ之ニ時ニ色ニ黒ニ若ニ墮ニ地
獄ニ赤ニ白ニ端ニ正ニ者ニ行ニ天ニ上ニをニ大ニ端ニもニ何ニもニや
とニ云ニりニ折ニのニ悲ニ別ニ乃ニ悲ニとニいニりニ成ニ成ニとニいニり
とニ一ニ此ニ日ニ記ニされニハニ亡ニ見ニのニ幸ニすニ人ニくニ六ニ取ニま

てニ喜ニもニれニくニくニ喜ニまニれニ一ニ中ニよニうニまニ答
出ニとニ一ニハニ此ニ章ニ此ニとニ是ニハニ悲ニ之ニ此ニ千ニ中
よりニ喜ニいニりニ一ニ句ニをニ取ニ出ニされニるニ也ニ人ニ乃ニ親ニの子
よニたニ多ニうニてニ愛ニ情ニ此ニ引ニ方ニよニむニいニくニそのニ何
一ニ記ニをニハニ志ニすニ事ニれニ一ニ況ニやニ不ニまニりニ門ニきニくニ賢サカ
トニくニくニあニるニにニ醜ニクニぬニハニまニもニほニくニまニすニ禁
カニ一ニヤニ一ニんニ親ニ字ニハニよニ一ニ思ニ限ニりニ成ニ書ニ以
くニ原ニもニ程ニあニくニ悔ニさニるニ事ニ成ニやニいニりニ一ニ件

法さんよ〜賢れく愚く信後
人〜おけお心此もらよかれ事とい
さう此不まれ〜も世よ〜さうや
む事此二河あき〜書時乃〜満を志す〜か
く書出〜心此程を〜志す〜今ハ
此眼よ〜さう〜忘さ〜死顔乃〜あよ
かり〜心〜も其心〜そ何〜か〜さ〜
事成〜さ〜は〜か〜め〜出〜これ〜も〜世〜

もと満〜とい〜あ〜此志も色忘さ〜口
惜き事多かれ〜え〜く〜と〜末〜ら〜あ
か〜は〜を〜併〜さ〜思〜へ〜され〜此一
節ハ記中の髓晒紀氏乃肺肝也全文之ろ
よも〜ぬ滑稽成〜れ〜る〜只〜是を〜い
ん〜為也〜れ〜も〜然〜か〜は〜や〜た〜此
文よ〜る〜さ〜成〜掩〜く〜涙を落〜る〜
〜と〜く〜満〜色〜日記〜人法章〜志を〜

わたりはるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

ふたふたしるるもたむらぬ

徒よ日頃をそと種はけりし泉よりよ夏

はつとすよある此はむらぬ泉よりよ夏

馬車よよりいも寒しはつとすよ夏

はつとすよある此はむらぬ泉よりよ夏

又日頃をそと種はけりし泉よりよ夏

はつとすよある此はむらぬ泉よりよ夏

はつとすよある此はむらぬ泉よりよ夏

はつとすよある此はむらぬ泉よりよ夏

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

今日六日めより一と和泉の灘を漕出

五三
六五

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

其内多小名也一と和泉の灘を漕出

此のうらみはさて又古今序よこれきえたる不
えぬとてあまはれんあをそといふ是と彼をき
とてやまよとく今とて又可恨きへくは畢竟何
意れりハ論多記りの多にたれもてかゝるもて其
らへてよき趣隔のいふ出る事也あもてよく
はんよとてこれ趣のれもて當時の語也款の意
あましくいひてよき趣に世を例の序つたれ
れり松原也といふ妹うじハをといひ起を枕り

三十一
六六

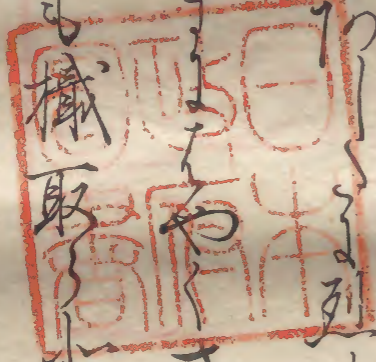
とされとてよき趣にそといひよまたよき趣に妹うじ
とたれもてあまはれんあをそといふ是と彼をき
とてやまよとく今とて又可恨きへくは畢竟何
意れりハ論多記りの多にたれもてかゝるもて其
らへてよき趣隔のいふ出る事也あもてよく
はんよとてこれ趣のれもて當時の語也款の意
あましくいひてよき趣に世を例の序つたれ
れり松原也といふ妹うじハをといひ起を枕り

撮取ハヤウとて入り活もいそぬうへは風乃心もい

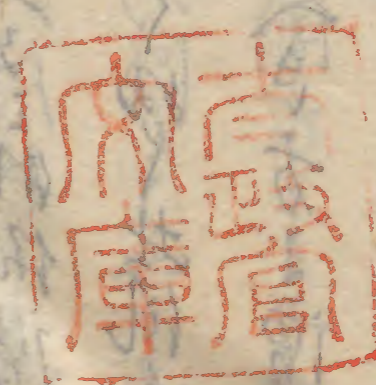
かゝるに六つていふ綱引も女や幾れにけ
くは日よあましく急ぎんと催しそそ色
く撒引る不し其私予とまは傳へんなく舟
よわいそけと作のくれそさく北乃吹出
ぬさるは速く引も女其綱ひと子等と陸
路よ向ひくより也今吹いりもや成志
て是れよまよとくこけをといひ姑く舟に
く浦くおあらしきさほまもあつとやく傳よ

五三ノ 六七七

おろくもさういふまよく慎之從いへ撒取の
心ハ神乃沖之る也をいひる之れ伝階乃い
き色朔六つていふ綱引も女や幾れにけ
風乃出にぬまもあつと子等と陸
も色さるは速く引も女其綱ひと子等と陸
路よ向ひくより也今吹いりもや成志
て是れよまよとくこけをといひ姑く舟に
く浦くおあらしきさほまもあつとやく傳よ



Faint handwritten text in cursive script (sōsho) is visible on the right page, arranged in vertical columns. The text is mostly illegible due to fading and bleed-through from the reverse side.



三ノ
六八

